SAPPORO 教区 NEWS
第６号
2006年12月24日
発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060 - 0031 札幌市中央区北1条東６丁目10
Tel. 011 - 241 - 2785 ／ホームページ：http://www.csd.or.jp

八雲教会献堂式

新聖堂竣工と教会創立五十周年を祝う

十一月二十五日（土）午前十一時から、新しくなった聖堂の献堂式と教会創立五十周年の記念ミサが行われた。百名以上の修道者や信徒が参加。

当日は晴天にも恵まれ、記念ミサには八雲教会縁の神父様や、パリミッション会管区長様ら十名が参加して、地主敏夫司教の司式で執り行われた。

地主司教は説教の中で、パリミッション会はじめ、出席なされた神父様方やすでに帰天された縁の神父様方に感謝なさると同時に、信徒の方々の今までの労を労った。そして「八雲教会も司祭が常駐することは難しくなってきているので、信徒が教会の力となり、地域へのイエス・キリストの証し人となるように育っていかなければならない。」と話され、かつて訪問したフランスでの例を紹介し語られた。「四十年位前からフランスでは主任司祭が常駐していない教会が多く、信徒を育てることが基盤となっている。それで、パリミッション会の神父様方には、信徒を育てる基盤が培われていると思われる。教会は、第一義に人々の集いを指し、後に第二義として人々が集う建物も言われるようになってきた。そして、第二義的建物として、前教皇は、祈るに相応しい建物としなければならないと語っている。聖霊が働いている人々の集いや、建物であることを示している。建物は大切である。しかし、そこに集う人々がもっと大切である。八雲教会が、イエス・キリストを証しする人々として、祈りの場として、これからも成長していくことを願っている。」と結ばれた。

その後、場所を変えて地主司教をはじめ、八雲教会縁の司祭、修道者、信徒の方々が多数参加して祝賀会が行われた。感謝の内に楽しい一時を過ごすことができた。

新たな八雲教会の第一歩がここに始まった。

神に感謝。

東室蘭教会五十周年

―合わせて、室蘭ブロックに静内教会を加えて、合同堅信式―

十月二十二日、東室蘭教会に地主敏夫司教を迎え、七人の神父の共同司式による荘厳なミサが捧げられ、献堂五十周年を祝った。

この記念すべきミサの中で、十七人（東室蘭・三人、室蘭・三人、伊達・四人、登別・五人、静内・二人）が堅信の秘蹟を受け、閉祭のあと、聖堂に入りきれない多くの信徒達から、祝福の拍手が贈られた。

地主敏夫司教は、説教で、今日の福音に触れながら語りかけられた。エルサレム

へ向かう旅の途中、イエスがこの世に王国を築くと思い込んだ弟子たちが、大臣にしてほしいと争う。教えを理解できない弟子たちに、イエスは悲しみながらも、「いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。」と教える。歴代の教皇が、回勅などの文書のサインに、ご自分のことを、「僕たちの僕」と書いている、この意味を深く理解してほしい。

堅信の秘蹟を受けた皆さんは、与えられた聖霊の恵みによって、本当の心、意味を理解し、勇気を持てるようになった。人々にキリストを証する正式なメンバーとして、福音宣教を荷って下さい。クリストス（＝もう一人のキリスト・油を与えられた人・使命を負っていく人＝）と呼ばれるのです。

ミサの後、会場をホテルに移して、なごやかに祝賀会が開催された。セシリア聖歌隊の合唱などを楽しむ一方、歴代司祭の思い出を胸に、今後の発展への努力を誓いあった。

湯川教会五十周年

王であるキリストに捧げられた函館・湯川教会が、その祭日である十一月二十六日（日）に五十周年を祝う記念ミサを行った。教会に縁のある修道者や信徒が聖堂溢れて三〇〇名程参列。

晴天に恵まれ、地主司教司式で、パリミッション会管区長、歴代の主任司祭の神父様方や函館地区の神父様方の出席を頂き記念ミサが執り行われた。

地主司教は説教の中で、「パリミッション会のお力添えで、元町、宮前に続いて、昨日記念ミサを行った八雲教会と一緒にこの湯川教会が創立された。先人の皆様に先ずは感謝申し上げたい。」と述べ、「『王であるキリスト』と言うと違和感を覚える人がいるかもしれない。イエスは、愛と真実と正義の国を証しするために来た。民族や男女などの差別のない、苦しみもない国の王と言っている。そして、私たちを福音的な国に導こうとしている。そのような国が来ますようにと叫んでいるイエス・キリストを祝う日が今日である。

先輩が築いてきた歴史を持っている皆さん、そして『王であるキリスト』を戴いている皆さんは、その使命を再確認して使命を全うしていただきたい。証しが出来る共同体として更なるステップを歩んでいただきたい。」と結ばれた。

その後、場所を変えて、感謝の内に、楽しくて和やかな祝賀会が行われた。

江別教会五十周年

江別教会（主任司祭　場崎　洋）は今年一月十五日で献堂五十周年を迎えたが、この年の教会暦最終主日の「王であるキリストの日」十一月二十六日に二分の一世紀を歩み続けてきた道のりをミサの中で感謝した。江別市は一八七八年、岩手から渡ってきた屯田兵五十六人が入植したのを機に発展し、一九〇八年に操業した富士製紙工場はその後、王子製紙と合併し今日に至り、レンガ工場もいたるところに建てられてきた。江別市の信仰の初穂は一九三五年からはじまり光明社を創立したブライトン師が巡回して信仰の種を蒔き続けた。当時、信徒は男女合わせて一五五名にものぼり、今後の宣教拠点の下地を形成していった。また師は町の発展を願い、江別町に消防設備拡充のために十円を寄付し、お礼として江別町長名で感謝状を受け取ったが、宛名には「カトリック、ブライトン教会殿」になっており知られない笑い話となっているので面白い。その後、一九四三年、地主家（地主司教様一家）が円山から転入してくると巡回で訪れるブライトン師のお手伝いに勤しんだ。やがて終戦後の荒廃期を乗り越えていくと信徒も年々増加し続けた。小樽住之江で司牧に従事していた木内藤三郎師が青年たちを引き連れ、ブロックで手作りの教会を建て、輝かしくも一九五六年一月に献堂の日を喜び迎えたのである。初代主任司祭、木内藤三郎師、さらにその任を継いだ佐々木羊三師、高橋幸男師はすでに帰天したが、その後、佐々木輝男師、千徳康雄師、松本武三師、石上昭夫師に引き継がれた。今も家族的な温かい教会として地域に親しまれている。少子高齢化の煽りを受けながらも子ども達の歌声は未来に向かって前進している。

新田教会五十周年

十月八日（日）に新田教会創立五十周年をミサの中で感謝し祝った。

十年前に新田マリア院の五十周年と教会創立四十周年を祝った新田教会の歴史は、新田マリア院と共にある。

一九四五年に殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会のシスターお二人が新田に入植されたことが宣教の始まりである。新田マリア院付き司祭として、浅井晴雄神父から始まり、五名の神父が宣教司牧にあたられた。その後、初代主任司祭パチフィコ神父以来十七名の司祭が主任司祭、協力司祭を務められ、今日の新田教会が築かれている。

新田教会は、聖堂という建物を持たずに、新田マリア院の聖堂を借りて、シスター方、藤の園の方々、雪の聖母園生の人々と共に、「教会は人々の集まり」であることを実践している。今後「共同体」として更なる成長を遂げるだろう。

荒木関孝神父　池島亟羽神父　司祭叙階五十周年

荒木関孝神父、池島亟羽神父両師の司祭叙階五十周年を祝う記念ミサと祝賀会が北一条教会で行われた。

十二月二十三日に司祭叙階五十周年を迎える両師のお祝いの記念ミサは、北海道の季節柄、雪の積もる前にとの配慮で、十一月二十

三日（木・祝日）十時三十分から、司祭をはじめ修道者、信徒が二五〇名余り参加し、地主敏夫司教の司式で厳かに執り行われた。

地主司教は説教の中で「召命は神様からの召し出し。自分から選んでなるということはない。イニシアティブをお取りに成るのは神様で、それに従う方が神様の御旨に応えることになる。両師の似ているところは、ご両親が熱心なカトリック信者であったこと。お二人にとって、その影響は非常に大きかったと思います。

また、お二人は軍隊入隊経験者であって、カトリック信者ゆえに苦しまれたことだろう。そして、両師は中世のような神学校で世俗のアカを取り除くように育てられた希少な経験をお持ちの神父である。神様の召し出しに応え、神様の恵みを無駄にしないように努力なさった。教区長として皆様に感謝し。両司祭をおくって下さったご両親に感謝します。」と語られ、「司祭職を全うできるように、皆さんこれからも祈ってください。」と結ばれた。

両司祭は、司祭叙階のみ恵に至った経緯を語り、ともに「神父になるとは思っていなかった。神様の召し出しがあったのだろうか。これからも司祭のために祈って下さい。」と挨拶なさった。その後、場所を移しての祝賀会。地主司教の挨拶に始まり、両司祭と共に歩んだ修道者、信徒で幼稚園ホールを溢れんばかりの中、余興や思い出話で楽しい一時を過ごした。

☆金祝・初誓祝う☆

殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

▽金祝△

シスター原田志津、シスター山田千鶴、シスター伊藤綾子、シスター神坂コト、シスター下郡山和子、シスター二瓶規子、シスター渡辺麗子七名のシスター方の金祝を祝う記念ミサが札幌マリア院聖堂で、十一月二十三日（木・祝日）午後一時三十分、地主敏夫司教の司式で行われた。

ミサの中で、シスター方は、修道者としての召し出しと、絶えず新たな愛への招きに感謝した。今新たに約束したことに忠実に従うことが出来るように神様のお恵みを願い、聖なる生活の模範となるように。堅忍する者たちに約束されている報いに与ることができるように祈った。

▽初誓願△

シスター　マリア・ゲラルダ佐藤さゆり（北見教会）は、一十月二十三日（木・祝日）午後一時三十分からのミサで、神様が私をこの修道家族にお召しになり、神のために生き、師父聖フランシスコの模範に従って教会に奉仕するようお呼び下さったことに感謝。このお招きにお応えするため、本会において初誓願を立てる許しを願い、第三会の会則と生活、本修道会の会憲に従い、神に捧げられた貞潔・清貧・従順に生きることを三位一体の神に誓い、修道会に身を委ねた。

キリストの花嫁である印としてヴェールを、この世の迫害と神の慰めの印として十字架をそれぞれ授与され、初誓願を宣立した。

社会福祉シンポジューム開催

札幌カリタス主催
ボランティア・ネットワーク、カリタス家庭支援センター共催

十一月十八日（土）精神障がい者についての講演会が北一条教会で開催した。講師として「浦河べてるの家」ソーシャルワーカー向谷地生良氏を迎える。

べてるの家の立上げの経緯について早坂潔氏ならびに本田幹夫氏らと共に経験談を含めながら楽しい対話でもって紹介してくれた。聖堂には七十人近くの参加者があり、べてるの家の魅力に吸い込まれるように精神障がい者に対する見方、教会としての固定観念を打ち砕いてくれた。向谷地氏は新米のソーシャルワーカーとして浦河日赤病院に勤務し、アルコール依存者などの人々と生きる意味を模索。その傍ら牧師不在の教会堂に精神障がい者と寝食を共にする。経済的基盤を構築するために昆布などの海産物で売り上げを伸ばしてきた。べてるの家では幻聴、幻覚を否定せず、お互いの現状を分かち合うグループを形成。有りのままの自分をさらけ出しながらも活き活きした人間像が伝わってくる。三人からのメッセージを要約してみた。

▽早坂　潔 氏

僕はもう五十才。べてるにきて二十三年。二十七才の時に入った。浦河教会に軽い気持ちできたのだが、ごはんをいただいたりしてとても嬉しかった。奉仕することってどんなことか知らなかったけど、薪を割ったり、片づけをしたりして過ごした。とくに牧師さんが僕のために祈ってくれたことが嬉しかった。

▽本田　幹夫氏

一九九九年の七月、車に乗って愛知県から東京に出てきた。そしたらみんな自分を追いかけてくるような幻視に襲われた。その後、怖くなり新潟にでて車を捨てて、上半身裸になったまま裸足で線路を歩き続けた。最終的には警察に捕まえられ牢屋に入れられた。何が起ったのか分からなかった。両親に連絡がいって引き戻された。そ

の後テレビで早坂潔さんが映っていて、なぜ自分はこんなに暗いのに、彼はあんなに明るいんだろうと思い、父と一緒に浦河のべてるに行くことを決心した。途中、悪魔が自分を襲うような気配がして、店に寄るにしても、何をするにしても狙われていると思った。でも父さんが「ダー」と叫んでくれると、悪魔が逃げていったので助かった。その後、べてるの家に入り、自分に自信がつき、幻覚、幻聴がなくなってきたのだが、そうなると、ここを去らなければならなくなることを悲しみました。でも、こうして楽しくやっています。

▽向谷地　生良　氏

潔君はアンパンマンハンマーを使うとピーンとなって言うこと聞いてくれる。

潔君は自分を抑えることができなくなりガラスを割ったり、壁に自分の頭を叩きつける。それをやったあとは自責の念にかられて苦しんでしまう。

教会には牧師がいなく、その部屋を借りて一緒に住むことにした。いつも騒々しく、鍋などが飛んできたりして、教会の前が迷惑通りになってしまった。その後、牧師がやってきて、一所懸命に近所に誤りに行っていたことを思い起こす。

自分はいろいろと悩みながらもイエスの弟子たちを考えた。彼らはイエスにとってどうしようもない人々だったということが重々理解できる。それを考えると浦河の教会はそれとそっくりだと思って勇気づけられた。敬虔なキリシタンであればいいが、地域と一緒に悩んだりしていることは順調に進んでいることなどと思ったので別な意味で救われた。私たちの働きは社会や理想とは正反対の方に向かっていた。なぜ、こうなのかと社会常識に囚われて悩んでしまうが、相手を変えさせようとするのではなく自分が変わらなくてはならないとつくづく思った。社会が望む人間像とは正反対の道に入っていくことによって自分も変わっていく。要するに自分とのつきあいに苦労しているんだなあ～と思い、自分で練習していかなくてはならないと感じた。精神病を抱えた人々が自分で自分の助けを見つける浦河べてるの家。今日も順調に問題だらけが続いている。

＝浦河べてるの家のことなどを語るお三方＝

▽向谷地生良氏の略歴

べてるの家ソーシャルワーカー、北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科教授

一九九七年度北海道精神保健功労賞。一九九九年度精神神経学会第一回医療奨励賞。二〇〇〇年度若月賞を受賞。

主な出版物として

■「べてるの家の本ー和解の時代」　べてるの家の本制作委員会著・発行

■「べてるの家の『非』援助論」　べてるの家著・医学書院発行

■「べてるの家の『当事者研究』」　浦河べてるの家著・医学書院発行

■生活人新書「安心して絶望できる人生」　向谷地生良／浦河べてるの家著・ＮＨＫ出版発行

イースタービッレジ・ミンダナオ報告会

久しぶりの祐川神父の帰国に合わせて、「支える会」事務局は、支援者に対して初めての「報告会」を開催。

「イースタービレッジ便り」は年四回、各個人・各団体に送られていたが、直接支援者と話す機会を得て、より支援者の輪が広がればとの思いであった。

二〇〇四年八月、現在のイースタービレッジが落成して四年目を迎える。二〇〇二年にスタートとして六年目だ。経済的には試行錯誤しながらも、施設運営は少しずつではあるが充実してきている。

十月八日(日)午後二時、カトリック月寒教会での「報告会」には、五十四名が参加。「支える会」代表勝谷神父の支援者への感謝の辞から始まった。まず、ＤＶＤで子供たちの生活ぶりと笑顔の子供たちの歌と踊りが紹介された。(この歌と踊りは、ミンダナオのsound of musicだ、明るい笑顔がいい)今回、祐川神父の協力者中島儀一さんも一緒に来られ、話を聞くことができた。祐川神父との不思議な出会い。子供たちから「ロロ」(おじいちゃんの意)と呼ばれ、家族の一員として暮らしていること。自らの最後の奉仕の場所と考えていること等、心に沁みる話であった。

最後に、祐川神父より、支援者への感謝の辞と近況報告がなされた。敷地内に遊具、花壇、小動物コーナー、庭聖堂など施設の充実を図ってきたこと、中島さんが購入した畑からの野菜の補給（中島さんが野菜を作っている）、すこしずつではあるが施設運営は良くなってきていること。

今後の課題と夢を合わせて、次のように話された。地域社会に開かれた施設に

＝近況を報告する祐川神父＝

■支援金の振込口座■

【郵便振替口座番号】

０２７６０－３－３９４７３

【口座名】

イースタービレッジ・

ミンダナオを支える会

するために、ゲストハウスとホール（集会所）の建設、経済的自立に向かってのゴム農園の購入（一部購入予定）など課題は多いとのこと。また、現在、車が壊れて購入する必要に迫られている。交通機関の不便な現地では車は必需品であること。悪路が多いため、車の消耗も激しく、修理代も高いと嘆かれていた。

終了後、売店コーナーと子供たちの写真パネルがおかれたホールで、月寒教会のご好意のそばをご馳走になりながら、祐川神父と中島さんを囲み交流をもった。支援の輪は広がっていることはうれしいことだ。今後、経済的自立までには、まだ時間はかかるだろう。これからも、ご協力よろしくお願いします。

支える会事務局　松川

カリタス家庭支援センター活動へのご支援ありがとうございました

カリタス家庭支援センターを支援するクリスマスコンサートが開催

今年も、クリスマスコンサートが十二月二日（土）カトリック北一条教会で開催されました。各教会の皆様と、一般市民の皆様が札幌、苫小牧、岩見沢、恵庭、月形等から約二〇〇人ご来場下さいました。

北海道二期会のソリスト北島康子さん、高橋実規子さんのソプラノと手戸美穂子さんのフルート、坂口睦さんのピアノでクリスマスの歌のほかヘンデルのラルゴ、ラシャ・キオ・ピアンガ、バッハのアリオーソ等々。古典から現在までの曲が上手に編曲された素晴らしい演奏会を感動のうちに終えることが出来ましたことを心から感謝申し上げます。

出演された四人の方々も、聖堂の暖かい雰囲気に大変喜んでおられました。

ミニ喫茶コーナーと手作りのジャムやケーキやかわいい小物、（すべて皆様から無料で提供された物）も大好評で、皆様からの献金とあわせて財政的にも大きな支えを頂き感激しております。このクリスマスコンサートには、各教会の皆様の惜しみない応援の心が詰まっています。

事前の準備のほか、当日寒さのなか戸外に案内に立ってくださったボーイスカウトの方、玄関や受付、バザーのボランティアのほか、そっと待機して下さったにもかかわらず出番の無かった看護係。皆様のご好意にどのようにお応えしたら良いのでしょうか、と胸が熱くなります。「最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたこと（マタイ二十五・四）」といわれるイエス様が、皆様のご親切にお応えくださいますように・・・

カリタス家庭支援センター
代表　堤　邑江

青年の活動報告

「全道青年の集い」「ネットワークミーティング全国大会」

『全道青年の集い』

『目を覚ましていなさい～今私たちにできること』

全道青年の集いは、北海道の青年が年に一度集まり、分かち合いや交流を持つ。今まで函館、旭川、稚内等道内各地で実施。その内容は、毎年変わる実行委員によって計画され、第二十九回を迎える今年は十月八日～九日の一泊二日で札幌の北二十六条教会で行なわれた。参加者は約四十人。

テーマに則り集いは進められた。教会の中で青年活動がなくなり、青年が教会に現れることが少なくなっているのが現状だと思います。この「集い」を通じて、今私たち青年が教会にできることは何かを考え、青年活動を活発にしていきたいという願いがあり、このテーマにしました。

当日は、マタイによる福音書「目を覚ましていなさい」「十人の乙女」を読み、自分たちは目を覚ましている状態なのか、そうでない状態なのか、そもそも目を覚ましている状態とはどういったものなのかということを四つのグループに分かれて分かち合いました。

私のグループでは、「目を覚ましている」ことは神の言葉を素直に受け入れることである。しかし、仕事が忙しく慌しい中で生きていることで、自分の利のままになってしまって、イエスの言葉が実現できず、「目を覚ましている状態」ではないのではないかということが話し合われました。

その後、上杉神父様（教区青少年担当・月寒教会主任）、場崎神父様（教区事務局長）、エミール神父様（円山教会主任）、石崎シスター（札幌マリア院）によるパネルディスカッションを行いました。分かち合いの話を聞いて、神父様とシスターがどう感じたかを話してもらいました。私が印象に残っているのは、「『目を覚ましている』ということは、心も体も静かになり神の言葉を静かに聴くこと。そのことに喜びを感じること」という話でした。他にもパネラーの青年時代の貴重な話をたくさん聴くことができました。その後、再び分かち合いを行い、自分たちは「『目を覚ましている』という状態を少し固く考えていたのではないか。もっと回りに目を向け、自分たちにできることから始めればいいのではないか」という感想を話してくれた人がいました。私自身、今年の春に仕事を始めたばかりで、毎日を過ごすのに一生懸命になり、回りが見えていなかった状態だったと思います。もっと回りに目を向け、自分にできることを少しでも行って

いこうと感じました。

今回の計画段階は、実行委員がほとんど社会人で、集まることも簡単ではありませんでした。しかし、当日はたくさんの方に参加してもらい、また「楽しかった」「良かった」「この全道青年の集いを続けていってほしい」という声をたくさん聞くことができました。これも、司教様始め、上杉神父様、エムリク神父様、場崎神父様、エミール神父様、石崎シスター、北二十六条教会の皆さん、応援してくれた多くの信者の皆さん、そして参加してくれた皆さんのおかげだと考えています。本当にありがとうございました。

実行委員　神能　智恵

『ＮＷＭ in 大阪』

＝全国大会に参加して＝

九月十六日～十八日に聖心女子学院で全国から青年たちが参加しＮＷＭ・連絡協議会運営委員会が開催。

初めて参加する私には、全国の青年たちと交流し、情報交換をすることで、北海道の青年活動の活性化を目指す目的がありました。

十六日早朝、千歳空港発の飛行機に乗り関西国際空港に到着し、そこから二回ほどＪＲを乗り換え、目的地の聖心女子学院まで到着しました。ＮＷＭの最初のプログラムは『フィールドワーク』→〈人間文字〉→グループのメンバーで体を使い文字を作ること。〈家族写真〉→家族という雰囲気で写真撮影をすることでした。グループ構成は全十六グループで私は第六グループでした。会場は梅田の北野教会でしたので、一度通過した梅田まで戻ることになり「マジかよ!!」という感じでした。結局、女子学園にやっとの思いでたどり着いたところをＵターンしなければいけませんでした（涙）。あれは険しい道のりでしたよ。「まだぁ～？道あってるの？おかしくない？」などと言いながら目的地さがしの過酷な旅でした。

ようやく目的地の北野教会に到着。松村神父に初めてお会いすることができました。〈人間文字〉作りはグループで話し合った結果、「ＫＩＴＡＮＯにきたの？」というギャグを取り入れた人間文字を作り写真撮影することに決まりました。和気あいあいとした時間を過ごしました。人間文字終了後は、移動の時間を利用して各グループで〈家族写真〉を撮りました。その後、女子学院に戻り〈人間文字〉〈家族写真〉の写真発表会が行われました。フィールドワークは初対面の方たちと短時間でより親しくなれるプログラムだと感じました。

発表会では、審査員の松浦司教・松村神父・ＮＷＭでの食事を担当してくださった三木さんの三名で厳正なる審査で順位が決められました。笑いがあり楽しい発表会でした。

夕食後の全体会はフィールドワークから戻るグループが大幅に遅れたため、一部のプログラムはその後の交流会でおこないました。

夕の祈りではテゼの祈りをしました。この祈りは短い歌を繰り返し行うものだとしか知らず、深い意味は知りませんでしたが、今回、祈ることで自分自身について考える時間を与えてくれる祈りだと感じました。

交流会の前には田端神父ご本人が作られたオリジナルの曲「夢を求めて」と平井堅の曲を数曲披露してくださいました。そして、各地域のお土産を酒のつまみにしながら盛り上がりました。過去に参加した青年達の名前があがり「○○は元気か？」などと聞かれることも多かったです。私は、疲れと翌日に備え早く就寝しました。

二日目は、朝食後、グループに分かれ、わかちあいをしました。わかちあいのテーマは「なぜ教会に行くのか？」と、午後からのミサの共同祈願を考えることでした。私のグループのメンバーは幼児洗礼が多く、教会に行く習慣があるということ、教会に友達がいるということが主な理由として挙げられました。その答えも神さまの恵みなのではないのでしょうか。わかちあいが終わり、昼食をいただきました。午後からのミサの共同祈願では、グループで考え「一泊二日で家族が作れるなんてめっちゃお得やなぁ。このミサで派遣される私たちがこれをきっかけに世界中に家族の絆を強めていけますように」で共同祈願は決まりミサを行いました。

今回、初めて参加させていただき感じたことは「活発！」の一言です。なぜならひとりひとりに発想力があり即実行に移す行動力があるのです。私たち北海道の青年も実行に移す行動力がもっと強まれば活動的な青年会ができていくのではと思いました。

留萌教会　一戸　信之

各地区の動き

■ 札幌地区 ■

『要理担当者養成講座』プレ講座開催

十一月三日（祝日）北二十六条教会で札幌地区の小教区、修道会から六十六名が参加。講師は藤女子大助教授の木村晶子シスター（哲学専攻）。

九時五十分に札幌地区長の近藤光彦神父の挨拶の後に「信仰とは何か・伝えることとは」の演題で開講。本講座は、信徒の要理担当者の養成を目的として来年四月を目途に開講予定。

午前中は、「信じることとは」人間の基本的な営みとして「知ること」そこから「信じること」に進み、何故と問うことを通して、宗教に至る道程が示された。

午後は、「信仰とは・伝えることとは」＝「信仰は個人的体験であり、信仰によって自分は何を得たのかと問われる。信仰は喜びと共に試練もある。ご利益主義は信仰ではない。」と語られた。

「教会の意義」＝「祈りの共同体としての教会。」ミサにおけるイエスとの一

致に見られるカトリック教会の特性について話された。

最後に、求道者の性格、タイプによって柔軟に対応し、共感者・同伴者となっていくことが大切であると述べられた。

講義の後、質疑応答を経て分かち合いの時間が持たれ午後四時閉会。

これから益々司祭の減少が予想され、司祭常駐の小教区が減少する中で、いろんな形での信徒の奉仕が求められている。本講座は、新たに教会を訪れる求道者に対し、的確に信仰についての導入を計る体制作りを目指して行われる。

本講座への出席定員は、各小教区から五名。主任司祭を通して申込。

倶知安藤幼稚園
自然と調和・緑色の新園舎が竣工

十一月十八日雪を頂いた羊蹄山を望み青空のもと倶知安藤幼稚園（園長 久野神父・園児数約一二〇名）の新園舎落成式が行われた。

落成式では北海道カトリック学園理事長でもある地主敏夫司教による祝別に続き、多くの来賓の方々とともに子供たちの歌声、元気なお祈りの声が真新しい遊戯室いっぱいに響きわたり新しい園舎の誕生を祝った。

四月二十日の着工式後、工事は事故もなく順調に進み、子どもたちは日々姿を見せてくる新しい園舎の完成を心待ちにしてきた。

まず玄関を入ると寒い冬でも常に暖かく広い玄関ホール。その正面に子供に囲まれた聖母子像が園児を迎える。玄関には広いガラス越しに職員室が面している。各教室は全て南向全面に広くガラス窓を持ち、手洗い場も出窓になっていることからいつも四方から光が差し込みます。

そして二階まで吹き抜けになった広い遊戯室。音響にも配慮がなされ素晴らしい空間を作っている。トイレをけっしていやな場所にしたくない思いから、むしろ憩いの場といっても良い明るく立派なトイレ。広々とした中に和紙の内装など幼い子への配慮が行き届いた子育て支援室。広い厨房。そして今回設計のメインといえるのは二階の廊下がそのままのびて遊戯室の上に橋のようにかかっている見晴らし場。ここはステージを見下ろす単なる見晴らし場となっているだけではなく、両側が本棚で埋められた絵本コーナーになっている。ここでは子供たちが思い思いの姿勢でくつろぐことができ、好きな本を選んで絵本の世界に入っていくことができる。

倶知安の町は、海外からの観光客の増加や新幹線誘致と、これから未来に向けて開かれていくだろう。幼稚園の果たす役割、この園舎の存在も一層大きなものとなろう。未来を創造する子供たちの将来を祈りながら新しい出発をする。

感謝のうちに。

■苫小牧地区■

苫小牧キリスト教船員奉仕会設立二十周年を迎える。

一九八六年十一月十日、苫小牧市内五教会の司祭、牧師、信徒並びに海事関係者が集い、苫小牧港に多くの外国船員が上陸していること。世界中の港に船員のために働くチャプレンがいて一〇〇年以上の歴史を持つ奉仕活動が続けられていることなどを学びました。早速、訪船活動が教会のメンバーが中心になってスタートしました。私たちの訪船はFlying Angel（聖公会）、Stella Maris（カトリック教会）として船員たちに知られており、歓迎されました。

税関をはじめ行政機関、船舶代理店、船員経験者の方々の支援を受け、翌年にはシーメンズクラブを開設しました。以来、多くの市民がボランティアとして訪船、センター運営、送迎バス、広報などに参加して今日に至っています。

このたびの二十周年記念会には港湾管理者の苫小牧市長、海事関係者など来賓の方々、教会関係者および新旧ボランティア約九十名が出席しました。開会礼拝、植松日本聖公会首座主教、岩倉苫小牧市長のあいさつ、記念写真の後、なごやかな雰囲気の中ではるばるアメリカから出席されたジョイス&ジョージ・マギー師との再会、元ボランティアによる二胡の演奏など楽しいパーティになりました。参加者一同、これまでの歩みを振り返り、これからも船員たちの働きに感謝し、奉仕を続けていくことができるように心を新たにしました。私たちの活動が苫小牧市民の歓迎の気持ちを表すものになるように願っています。

現在、日本カトリック難民移住移動者委員会の中に「AOS(Apostleship of the Sea)船員司牧」のグループがあり、横浜、神戸、東京、北九州などでも船員奉仕活動が行われています。他の港町でも船員ならびに船員奉仕活動に対するご理解とご協力をお願いします。苦小牧の船員奉仕会、シーフェラーズセンターの見学などはいつでも歓迎します。

事務局長　柳谷豊
（苦小牧教会）

■函館地区■

八雲マリア幼稚園
新園舎落成

八雲教会に隣接する八雲マリア幼稚園（赤井睦美園長、園児数六十名）の新園舎が八月に完成。二学期から子供たちは新園舎で元気に幼稚園生活を楽しんでいる。十一月まで子どもたちは近くの遊楽部川に鮭の遡上と産卵を見に行き、自然のすごさに驚き、満喫している。マリア幼稚園は、モンテッソーリ教育をベースに縦割り保育を行っている。赤井園長は、父母がとても協力的で、誕生会など企画して親子揃って幼稚園生活を楽しんでいると笑顔で語っている。

「クリスマスを迎えて」

～イコンが語りかける主の降誕の霊性～

馬小屋以前

わたしたちはキリスト教世界のカトリック教会に属していますが、わたしたちの礼拝典礼や儀式は慣習的なものに傾きやすく必ずしも絶対的なものではありません。典礼のなかにはシリア、コプト、アルメニア典礼などその土壌や文化、言語によって様々な形をとってきます。

ローマ・カトリックではクリスマスになりますと馬小屋（プレゼピオ）を飾る習慣があります。これは十一世紀、イタリアのアシジの聖者フランチェスコによってもたらされたものといわれています。

フランチェスコはベツレヘムで起こった聖なる夜をそのまま再現して救い主の誕生を人々と共に祝いました。以後、この習慣がヨーロッパ一帯に広がりクリスマスに馬小屋を飾る習慣が典礼装飾の一部になっていきました。

ここでわたしたちは一〇五四年キリスト教会が東西に分裂した以前の時代に遡り、その伝統を堅実に受け継いでいるオーソドックス・チャーチ（正教会）の主の降誕祭の典礼の一部に目を向けてみたいと思います。世界史を学ぶときにわたしたちは客観的といいながら余りにも主観的とも言える専門家がつくった教科書を教え込まれ独自の歴史を垣間見ることになってしまうことがあります。

世界史の中心がヨーロッパ中心であったり、カトリック教会が中心であったりすることはある意味では偏りがあるのではないかと言っても仕方がありません。ルネッサンスといえば日本人の私たちには聞きなれた世界史の一齣でイタリア中心に栄えた芸術復興を思い浮かべてしまいますが、実はルネッサンスにおける宗教画の原型はビザンチン美術の中にあります。約一〇〇〇年に渡るビザンチン帝国の時間の流れの中にすでにいくつかのルネッサンスとなるべく美術芸術の最盛期（マケドニア・ルネッサンス等）があったことはわたしたち日本人にとって無縁のお話しになっていることは少々残念です。

さて、正教会では馬小屋の代わりに主の降誕のイコン（聖画）が聖堂内に飾られますが、このイコンのなかにルカならびにマタイ福音書を中心に救いの歴史の神学が凝縮されています。モノクロで申し訳ございませんが写真のイコンをごらんください。主の降誕劇の流れについて登場人物とその霊性についてお話していきたいと思います。

ベツレヘムの星：

救い主の到来を告げる星です。星は御言葉が人となって幼子イエスに光を放ちます。神の受肉です。この星は救い主に向かって三本に分かれた光線となっていきますが、これは三位一体の神秘を象徴しています。

博士たち：

左上には三人の博士が馬にまたがってやってきます。彼らは異邦人であり、また博学と知恵に満ちた賢者ですが、救い主の星に導かれて幼子のまえで頭を垂れます。わたしたちも暗闇に住む民が光を見るよう人生の途上でいつも救い主の星を見失うことのないように歩み続けなくてはなりません。博士が三人なのは贈り物が黄金、乳香、没薬だったからです。

天使：

右上に三人の天使がいますが、二人は救い主の星を見詰めながら、三人博士の到来を待ち続けています。もう一人の天使は中央右端にいる羊飼いたちに「今日わたしたちのために救い主がお生まれになった」ことを告げています。中央左の天使は幼子イエスを崇め賛美しています。

ヨゼフ：

ヨゼフは左下にいますが、座り込んで考え事をしているようです。恐らくマリアを妻として迎え入れていいのか困惑しているのでしょう。その迷いを起こし唆しているのが向かい側にいる毛衣を纏った老人（悪魔）です。

産湯につかる幼子：

赤子が生まれたら、助産婦（師）が産湯できれいにします。これを神学的に観ると受肉のしるしとも言えますし、清めと主の洗礼の前表になっています。

聖マリア：

このイコンの構図の中軸に位置する聖マリアはなぜ救い主に背を向け横たわっているのでしょうか。産後のことですから、体力も消耗していますので休憩しているのかもしれませんが、ルカ福音書から理解できるように天使ガブリエルから告げられた救い主の誕生の知らせのことを心の中で思い巡らしているのが窺われます。わたしたちも子供の誕生をどのように黙思するでしょうか。ただ生物学に生まれてきたと言う短絡的な考えであってはなりません。いのちの誕生とその出会いには深い神のみ業が秘められています。マリアは幼子の誕生と御言葉の狭間のなかで新たに始まる救いの歴史を思い続けているに違いありません。

幼子イエス：

幼子イエスは洞穴の前にいます。救い主は馬小屋で生まれたと思い込んでいる人がいるかもしれませんが、聖書にそのような記述はありません。マタイは三人の博士がベツレヘムに到着したとき幼子のいる場所を「家」と表現し、ルカは乳飲み子を据えた「飼い葉桶」（貧しさ）でもって伝えていますので、推測できるのは馬小屋であっても不思議ではないでしょう。当時、馬や牛は放牧されていながらも洞穴に身を寄せていたこともあったと言われます。イコン画家は洞穴と言う暗闇に住むわたしたちのイメージを前面に打ちたて、そこに救い主がお生まれになったことを告げ知らせています。すなわちヨハネ福音書第一章のロゴス（言葉）賛歌です。光は神であり暗闇に救い主神の子の光がさしたのです。でも、よく観ていただきたいのですが、ここに描かれている飼い葉桶はまるで死者を葬るための棺桶に似ています。イエスの時代の飼い葉桶は石灰の石に溝を掘り、そこに藁や葡萄の絞り粕を入れて家畜に食べさせていたと言われています。しかし、もっと深い神学的な意味があります。洞穴はイエスの墓（死）、イエスは棺に入れられ、さらには布にくるまれている様はルカの誕生物語に由来していますが、イエスの「空の墓の出来事」（ヨハネ福音書の記述）のなかにある亜麻布にも言及しているのに気づきます。すなわち、このイコンは「主の誕生」と「主の復活」を称えるものとが重なりあっていることが読み取れるのです。

このようにイコン画家は正教会においてはみ言葉を絵でもって書き（「描く」とは表現しません）霊的協力者でもありました。ひとつの出来事を一枚のキャンバス、すなわち聖なる窓（フィネストラ）として御言葉（神の世界）を展開させていったのです。もし、機会がございましたら主の降誕のイコン（コピーでも構いません）を暗闇のなかに据え、その前にローソクに火を灯し、神のみわざを観想してはどうでしょうか。馬小屋伝説の中に忘れかけている主の降誕の霊性が今も生き続けています。

（S・B）

■　教区・各地区行事

▼教区
1月29日（月）～30日（火）　教区司祭月例会　（花川マリア院）
2月26日（月）～27日（火）　教区司祭月例会　（花川マリア院）

▼札幌地区
1月10日（水）　地区宣司評事務局会議
2月7日（水）　地区宣司評事務局会議
18日（日）　典礼委員会　講演会
（予定　詳細を追ってご案内します）
25日（日）　第5回評議会　（月寒教会）
3月7日（水）　地区宣司評事務局会議

▼函館地区
3月26日（月）～28日（水）　四旬節共同回心式
（宮前町・湯川・元町）

▼旭川地区
1月1日（日）　旭川市内合同ミサ　（旭川5条教会）
7日（日）～8日（月）　旭川地区侍者会
（カトリックセンター）
23日（火）　旭川宗教者懇話会
28日（日）　旭川市内合同ミサ　（旭川5条教会）
2月7日（水）～8日（木）　旭川地区会議
25日（日）　旭川市内合同ミサ　（旭川5条教会）
3月21日（水）～22日（木）　旭川地区会議
25日（日）　旭川市内合同ミサ　（旭川5条教会）
4月5日（木）～7日（土）　旭川市内合同聖週間の典礼
18日（水）～19日（木）　旭川地区会議
22日（日）　旭川市内合同ミサ
29日（日）　旭川市内合同ミサ

■苫小牧地区
2月1日（木）　シーフェラーズ役員会
（シーフェラーズセンター）
18日（日）　シーフェラーズ総会
（シーフェラーズセンター）

■北見地区
1月　オホーツク冬季学校（予定）（北見教会）
2月　地区宣司評

北海道ダルク第3回フォーラム

開 催 日：2007年１月27日（土）
開催時間：13：00～16：30
会　　場：札幌コンベンションセンター
（白石区東札幌６条１丁目）
内　　容：仲間と、支える人達の話

「さっぽろ教会音楽祭での献金の報告」

プロテスタント超教派で実施している「さっぽろ教会音楽祭も今年で10回目を開催できました。今年はカトリック北11条教会で６月10日に開催され、教会の皆様には大変おせわになりました。募金金額は、91,847円集まり、放送伝道事業「ホレンコ：北海道マスコミ伝道センター」へ寄付いたしました。カトリック教会の皆様へのご報告が遅れて申し訳ありませんでした。感謝してご報告申し上げます。　（実行委員会）

■訃報■

神様のみもとでの安息をお祈りします。

■フランシスコ修道会 アントニオ青木孝由神父様 追悼ミサが行われる

十一月七日に帰天されたアントニオ　青木孝由神父の追悼の祈りと追悼ミサが旭川五条教会と札幌北十一条教会で行われた。

十一月二十六日（日）、旭川市内の合同ミサ（五条教会）において、故青木孝由神父を追悼する祈りが行われた。鈴木　央神父の司式で、説教の中で青木神父様を偲び、若かりし頃のことから旭川での病気の発症、聖地巡礼、晩年のイスラエルのことや六本木のチャペルセンターでの様子など、色々な思い出話しやエピソードが語られた。苦小牧や小樽など遠くからも身内の方々はじめ、縁のある方々が三五〇名程参列。最初の任地の名寄教会や士別教会、道北地区の幼稚園をまとめて作った旭川カトリック学園、いろいろな分野の方々と力を合わせて発足させた「いのちの電話」の関係者も列席した。

十二月五日（火）には、北十一条教会にて、フランシスコ会 湯沢　民夫　管区長の司式で行われ、菊池　勝　神父が青木神父との思い出を交えながら説教をなされた。「当時、今とは違って二十人程の同級生の神学生がおり、青木神父は演技を磨いて楽しむグループに所属し座長を務めた。二十六聖人の聖劇を練習し、東京で公園を行った。それが評判となり札幌でも青木神父が演出し公演を行った。様々なことで頼れる神父だった。」と懐かしそうに語られた。ミサの終了後、信徒会長の澤田氏が常に弱い立場の人々のことを考え、英語ミサを積極的に取り入れ、教会の体制整備にも尽力され、自らの行いをもって信徒に道を示したくれたことに感謝を述べた。

【青木神父　略歴】

1934年1月30日　釧路市生まれ
1956年3月24日　発誓願
1959年9月17日　荘厳誓願
1962年10月7日　司祭叙階
1964年1月　名寄教会助任
1966年9月　士別教会主任
1970年10月　ヨーロッパ研修
1973年6月～　大町教会主任、旭川五条教会、旭川六条教会、北11条教会主任を歴任
2006年11月7日　帰天　享年72歳

■マリアの宣教者 フランシスコ修道会 マリア　村上ふみシスター

【略歴】

1904年9月20日　宮城県大河原町生まれ
1926年12月8日　入会
1929年12月8日　初誓願
1937年12月15日　終生誓願
2006年10月13日　帰天・修道生活80年　享年102歳

教区の風

十一月四日（土）、午前十時からカトリック円山教会において、聖霊による刷新さっぽろ祈りの集い主催の「一日賛美の集い」が開催された。参加は、神父様三名をはじめ約七十名。遠く旭川・函館からの参加者もあり、広いホールは二重の輪で埋め尽くされた。

この集いは、毎月二回、夜に行われている「祈りの集い」のほかに、休日を利用し、十年ほど前から年に一回開催されており、函館地区でも行われている。

今年の集いは「さあ、主をほめよ」をメインテーマに、午前に賛美・分かち合い、午後からは賛美とミサが行われ、参加者の中には、御受難修道会（大阪教区）の畠基幸神父様がおられました。賛美の集いは「主の前にひざまづき、こころから賛美ささげる…」という歌から始った。司会者は詩編一四五にふれながら、絶えることなく神を讃えましょうと歌をリードする。そして、畠神父様から聖書の御言葉「主を賛美するために民は創造されました」と、賛美することの素晴らしさのショートメッセージがあり、その後、二人の姉妹から、子供を通してもたらされた神からの恵みや、夫の介護の中にも働いておられる神のみ業の感動的な分かち合いがあった。

さらに、小グループに分かれて「自分自身が神と出会った体験」の分かち合いが行われた。昼休み時間には、今年、香港で行われたアジアユースディに札幌教区から一人参加した青年から、飛び入りのミニ報告があり、参加者は写真なども見ながら、若者のエネルギーに驚きながらも、大きな拍手で応え、これからの活躍を大いに励ました。

午後からは、引き続き賛美の時間がもたれ、その後、一同感謝のうち会場を聖堂に移し、エミール神父様、畠神父様ら三人の共同司式でミサが行われ「一日賛美の集い」は終えたのでした。

さっぽろ・祈りの集いは毎月第一、三火曜日、午後六時半から北海道クリスチャンセンターで「祈りの集い」を行っており、どなたでも参加することができます。また、来年五月三～五日、NTT北海道セミナーセンターで第二十二回聖霊による刷新北海道大会が開催されます。

事務局　石井志郎

■編集後記■

「声に出して読んでください。神様の言葉が心に響きます。」という赤い帯が目に入った。「子どもに語る聖書（ドイツ・カトリック教会司教会議編／こぐま社刊）」の絵を取り入れた聖書のコピーである。聖書の大切なところをそのまま抜き出して、彩り豊かな絵を添えてある。

この他にも子供向けの聖書はある。クリスマスのひと時を、声を出して子どもに読み聞かせる。あるいは、子どもと共に声を出して読んでみる。この様なプレゼントも素敵では…。聖書の言葉が心に深く刻まれることでしょう。（編集子）